

大学・附属学校園連携プロジェクトの成果と課題 —2023年度に実施した附属学校園アンケートの分析から—

鈴木 一成* 真島 聖子** 小塚 良孝***

*保健体育講座
**社会科教育講座
***外国語教育講座

Achievements and Challenges of the Collaborative Project between Aichi University of Education and its Affiliated Schools - Analysis of the questionnaire conducted in 2023 at the affiliated schools -

Kazunari SUZUKI* Kiyoko MAJIMA** and Yoshitaka KOZUKA***

*Department of Health and Physical Education, Aichi University of Education, Kariya, Aichi, 448-8542, Japan

**Department of Social Studies Education, Aichi University of Education, Kariya, Aichi, 448-8542, Japan

***Department of Foreign Languages Education, Aichi University of Education, Kariya, Aichi, 448-8542, Japan

Keywords : 大学 附属学校園 連携 アンケート調査 活用

I 目的

本稿では、2023年度に実施した附属学校園アンケートの分析から「未来共創プラン戦略6 大学・附属学校園連携プロジェクト（以下、戦略6）」の成果と課題を明らかにすることを目的とする。

戦略6は、2021年3月に策定された「未来共創プラン」で掲げた目標2「大学と附属学校園との連携強化を図ることで、より質の高い教員研修を実現します」に位置付くものである。具体的な内容は、「教育委員会や教育現場との緊密な連携を通して、附属学校園が今後の公立学校等のモデルとなる実証研究に取り組むこと」である。戦略6は、第4期中期計画にも位置付いており、その評価指標には、「附属学校園の研究等を公立学校に活用したかどうかを調査するアンケートを実施し、アンケート結果に基づいた改善策を考え、改善のサイクルを令和6年度までに構築し、令和7年度からは、構築したサイクルに基づき改善を行うこと」が設定されている。以上のような位置付けの下、戦略6では、2022年度から、7附属学校園との共同研究により、公

開研究会等において、アンケート調査を実施している。2022年度に実施したアンケートの結果から次の成果と課題が明らかとなった。

- ・ 7附属学校園の研究発表会は「関心度・理解度・参考度・活用度」の4項目すべてにおいて、肯定的な回答が否定的な回答を上回ることができた。
- ・ 肯定的な回答者の教員経験年数は、「1年～5年」「6～10年」「11～20年」「21年以上」の区分において、大きな偏りがなかった。そのため、どの教員経験年数にも対応する研究内容であったと考える。
- ・ 「活用度」は、他項目と比べると低い。「活用度」と他項目の関係と教員経験年数による差の検討は次年度の課題といえる。
- ・ アンケート結果は、2022年度の大学・附属学校園連携プロジェクト（戦略6）における検討対象となり、大学と附属学校園が一体となる特色を生かした実証研究に取り組む素地づくりになった。

これを受けて、2023年度の戦略6の会議では、「活用度」に関する検討を月1回のリモート会議の論点として設定した。

なお、各附属学校園は独自の実践的研究主題を掲げ、赴任教員の研鑽の場となるとともに、公開授業などの研究発表会により公立学校等の授業実践の質向上に寄与してきた。しかしながら、激変する教育環境と社会変化において、これまで以上に大学と附属学校園の連携が重要になる。とりわけ、大学と附属学校園が一体となる特色を生かした実証研究に取り組み、地域の教育現場への還元を目指す

ことは重要となる。以上の考えを共有し、その具体策として、各附属学校園の研究会の成果を把握するためのアンケート項目について検討し、実施した。

II 方法

1 附属学校園のアンケート項目

図1は、附属学校園のアンケートである。本アンケートは継続研究を想定しているため、

研究会にご参加いただいた皆様へ				
愛知教育大学附属〇〇学校(幼稚園)				
この度はご参加いただき、誠にありがとうございました。附属学校園の評価並びに研究会の改善のため、皆様のご意見・ご要望をお聞きかせ下さい。個人が特定される形での外部への公表は行いません。後日、改めて、活用状況等について、お話を聞かせいただくことがございます。その際にはご協力頂ければ幸いです。				
ご所属	ご芳名			
教員経験年数(数字に○をつけてください) 1. 1~5年 2. 6~10年 3. 11~20年 4. 21年以上				
ご参観授業①【学年・クラス】()年()組【教科・領域】()				
以下の各項目に関しご自身の考えに一番近いものに○をつけてください。	とても思う	少し思う	あまり思わない	全く思わない
【関心度】内容・ねらいに関心があった				
【理解度】内容・ねらいが分かりやすい				
【参考度】今後の教育活動の参考になった				
【活用度】今後の教育活動に活用しやすい				
ご参観授業②【学年・クラス】()年()組【教科・領域】()				
以下の各項目に関しご自身の考えに一番近いものに○をつけてください。	とても思う	少し思う	あまり思わない	全く思わない
【関心度】内容・ねらいに関心があった				
【理解度】内容・ねらいが分かりやすい				
【参考度】今後の教育活動の参考になった				
【活用度】今後の教育活動に活用しやすい				
上記のご評価についての詳細や、その他にご感想やご要望等がありましたら、お聞かせください。				
アンケートにご協力いただき、ありがとうございました。				

図1 附属学校園のアンケート (印刷版)

昨年度と同様のアンケートとした。7 附属学校園のすべての研究内容に対応する内容と、参加者の記述や記入に際しての簡便性を考慮し、共通項目として、「関心度」「理解度」「参考度」「活用度」の4つを設定した。また、独自項目として、各附属学校園がこれまで積み重ねてきた研究等に鑑み、独自に参観者の回答を求める項目を設定してもよいこととした。

2 実施方法

本アンケートは、2023年における各附属学校園の研究発表会の参加者を対象として、紙面及びwebで実施した。実施時期は附属幼稚園が11月9日、附属名古屋小学校が5月30日（春の公開授業時）・11月7～14日（秋の公開授業時）、附属岡崎小学校が11月16～17日、附属名古屋中学校が9月22日、附属岡崎中学校が6月20日、附属高等学校が11月8日、附属特別支援学校が11月10日であった。

Ⅲ 結果と考察

1 附属幼稚園

表1は、附属幼稚園の公開保育兼研究発表会におけるアンケート回答者数と回答者の教員経験年数を整理したものである。

表1 回答者の教員経験年数

教員経験年数	人数
1～5年	37
6～10年	47
11～20年	45
21年以上	22
合計	151

表2は公開保育時に実施したアンケートの集計結果、表3は研究発表会の際に実施したアンケートの集計結果である。

表2 公開保育の集計結果 n=143

項目	とても思う	少し思う	あまり思わない	全く思わない
関心度	135	8	0	0
理解度	111	32	0	0
参考度	133	10	0	0
活用度	91	50	2	0

表3 研究発表の集計結果 n=152

項目	とても思う	少し思う	あまり思わない	全く思わない
関心度	138	14	0	0
理解度	138	14	0	0
参考度	138	14	0	0
活用度	120	31	1	0

参加者の教員経験年数は、昨年度が「11～20年」が最も多かったが、本年度は「6～10年」が最も多くなった。昨年度は教員経験1～10年と11年以上が半々の割合であったが、本年度は教員経験1～10年参加者全体の57%とやや多くなった。

表2、表3における各項目については、昨年同様、肯定的な回答が否定的な回答よりも大幅に上回っている。特に「関心度」及び「参考度」の割合は他項目に比べて相対的に高く、公開保育及び研究発表会におけるねらいと内容への関心が高く、今後の教育活動に参考になったといえる。また、「理解度」も肯定的な回答が否定的な回答よりも大幅に上回っていることから、ねらい・内容について分かりやすかったといえる。

「活用度」における否定的な回答は公開保育で1名、研究発表会で1名であった。本年度、附属幼稚園では全体での研究発表や講演会を実施しなかったが、①保育を語る会、②研究経過報告、③施設参観を実施した。①～③は参観者との対話の機会を増やす試みとなったため、引き続き、活用する側のニーズをとらえていく機会としていきたい。

2 附属名古屋小学校

表4は、附属名古屋小学校の春と秋の実践研究発表会におけるアンケート回答者数と教員経験年数を整理したものである。

表4 回答者の教員経験年数

教員経験年数等	春	秋
1～5年	56	12
6～10年	29	6
11～20年	57	9
21年以上	35	13
合計	177	40

表5・6は春と秋の各公開の集計結果である。回答者には「不明」、「複数回答」及び学生（春20名、秋59名）や企業等（春7名、秋11名）の回答も含まれていた。ライブ配信の数も含めると春の公開は176名、秋の公開は194名であった。

表5 春の公開の集計結果 n=202

項目	とても思う	少し思う	あまり思わない	全く思わない
関心度	167	33	2	0
理解度	146	47	9	0
参考度	165	32	5	0
活用度	139	58	4	0

表6 秋の公開の集計結果 n=110

項目	とても思う	少し思う	あまり思わない	全く思わない
関心度	98	12	0	0
理解度	91	16	3	0
参考度	103	7	0	0
活用度	86	22	2	0

参加者の教員経験年数は、春と秋の公開では昨年同様「11～20年」が最も多くなった。春公開では「21年以上」と合わせて教職経験を有する参加者全体の約45%を占めた。また、秋の公開には「21年以上」が他項目に比べて最も多くなり、いずれも昨年度と同様の傾向であったといえる。

表5・6における各項目については、昨年同様、肯定的な回答が否定的な回答よりも大幅に上回っている。「関心度」ではねらい・内容についての関心が高かったといえる。否定的な回答は一定数あるものの、春の公開での「活用度」については、昨年度の肯定的な回答数は全体の93%であったが、本年度は98%であり、改善が図られたと考える。コロナ禍明けで試行錯誤しながらではあったが成果と考える。また、「理解度」については昨年度の肯定的な回答数は全体の97%であったが、本年度は96%であり、横ばいである。この改善に向けて、今後の教育活動への理解や参考となる取り組みとして、附属名古屋小学校では、次の①～⑤を展開した。①春の実践発表会と稲沢市の初任者研修会との連携、②

「デザイン思考」についての学習会を一般の先生を交えて7月に実施、③秋の公開授業に向けた「夏の検討会」を一般の先生方にも公開して実施（数名の先生方が参加）、④本校教員による各出身市町への出張学習会の実施、⑤会員制サイトの作成（授業動画や指導案などが閲覧可）。引き続き、研究の「理解度」と「活用度」に向けた充実を図っていきたい。

3 附属岡崎小学校

表7は、附属岡崎小学校の学校研究及び提案授業におけるアンケート回答者数と教員経験年数を整理したものである。

表7 回答者の教員経験年数

教員経験年数	人数
1～5年	49
6～10年	21
11～20年	42
21年以上	31
合計	143

表8は学校研究、表9は提案授業の各集計結果である。研究の趣旨を説明する学校研究と提案授業は、同日に実施された。なお、1日目の全体会は動画撮影をすることで、2日目からの参加者も全体会の内容を知ることができるようにした。

表8 学校研究の集計結果 n=203

項目	とても思う	少し思う	あまり思わない	全く思わない
関心度	163	38	2	0
理解度	144	56	3	0
参考度	162	40	0	0
活用度	114	83	5	0

表9 提案授業の集計結果 n=205

項目	とても思う	少し思う	あまり思わない	全く思わない
関心度	168	34	3	0
理解度	144	55	5	0
参考度	169	35	0	0
活用度	136	63	5	0

参加者の教員経験年数は、「1～5年」が最も多くなり、昨年度と同様の傾向となった。なお、学生数を含めると206名の参加数となった。

表8・9における各項目については、昨年同様、肯定的な回答が否定的な回答よりも大幅に上回った。特に、「参考度」は否定的な回答がなく、昨年度は学校研究で1名、提案授業で2名の否定的回答があったことから今後の教育活動に参考になったといえる。また、「関心度」においてはねらい・内容についての関心が高かったといえる。その上で、「理解度」と「参考度」についても否定的な回答の割合は肯定的な回答に比べて、相対的にかなり低い。否定的な回答の相対的な数値をみると改善する点も見出すことができる。附属岡崎小学校の2023年度の「活用度」に関する取組は、以下の①～⑥である。①全体授業研究会（提案授業・研究協議会・外部講師からの助言）への研究会員の参加（5/18理科；岡崎地区の教員2名参加、6/22社会；岡崎地区の教員2名、田原地区の教員1名参加、9/29国語（蒲郡地区の教員1名参加）、12/4算数（蒲郡地区の教員1名参加）、②令和5年度11名の研究会員を対象として、年6回の全体授業研究会の参加機会の提供、③附属小職員19名の年間8回分の授業案、授業づくり資料等をダウンロードして閲覧可能にする取組、④岡崎市の算数・数学部会に向けた提案授業とパネルディスカッション（授業者、パネラーとして本校職員が参加；参加者80名程度、6/17実施）、⑤本校職員による三河地区（地区の教科部会、学校など）、教育センター、愛知教育大学への指導出張（助言者、司会者、講師として）、⑥書籍出版。研究のねらい・内容についての分かりやすさや、今後の教育活動に活用しやすい内容につなげていく機会を展開していきたい。

4 附属名古屋中学校

表10は、附属名古屋中学校の研究発表会におけるアンケート回答者数と教員経験年数を整理したものである。回答者には「不明」及び「無回答」が含まれていた。

表10 回答者の教員経験年数

教員経験年数	人数
1～5年	7
6～10年	18
11～20年	40
21年以上	28
合計	93

表11は学校研究の集計結果である。

表11 学校研究の集計結果 n=105

項目	とても思う	少し思う	あまり思わない	全く思わない
関心度	81	24	0	0
理解度	77	27	1	0
参考度	77	26	2	0
活用度	51	48	5	1

参加者の教員経験年数は、「11年～20年」が最も多くなり、昨年度と同様の傾向となった。

表11における各項目については、昨年同様、肯定的な回答が否定的な回答よりも大幅に上回った。「関心度」は否定的な回答がなく、ねらい・内容についての関心が高かったといえる。また、「理解度」及び「参考度」においても昨年度同様、肯定的が否定的を大幅に上回り、ねらい・内容について分かりやすいものであり、今後の教育活動に参考になったといえる。

こうした傾向は「活用度」に見られるが、否定的な回答における他の項目での数値を相対的にみれば「活用度」の否定的な回答の数値は高い。附属名古屋中学校の2023年度の「活用度」に関する取組は、以下の①～③である。①県総合教育センターの高校担当者から、英語の教科論を紹介したいとの声掛けがあり、高校の教員向けの資料として使用したこと、②高校や中学の研修の一環としての参加があったこと、③研究協議会において共同研究者からの積極的発信を得たこと。教育活動に活用しやすい内容につながる取組を今後も考えていきたい。

5 附属岡崎中学校

表12は、附属岡崎中学校の公開Ⅰと公開Ⅱ

におけるアンケート回答者数と教員経験年数を整理したものである。

表12 回答者の教員経験年数

教員経験年数	公開Ⅰの人数	公開Ⅱの人数
1～5年	14	9
6～10年	12	10
11～20年	25	24
21年以上	19	15
合計	70	58

表13は公開Ⅰの集計結果である。また表14は公開Ⅱの集計結果である。公開Ⅰと公開Ⅱは同日に実施されたものである。

表13 公開Ⅰの集計結果 n = 70

項目	とても思う	少し思う	あまり思わない	全く思わない
関心度	51	18	1	0
理解度	33	31	6	0
参考度	45	24	1	0
活用度	21	38	11	0

表14 公開Ⅱの集計結果 n = 58

項目	とても思う	少し思う	あまり思わない	全く思わない
関心度	39	19	0	0
理解度	24	30	4	0
参考度	31	25	2	0
活用度	19	33	6	0

参加者の教員経験年数は、公開Ⅰ及び公開Ⅱともに、「11年～20年」が最も多く、昨年度と同様の傾向となった。なお、アンケートの回収率は低かったが、参加者は457名であった。

表13・14における各項目については、昨年同様、肯定的な回答が否定的な回答よりも大幅に上回っている。特に「関心度」と「参考度」の結果から、ねらい・内容についての関心が高く、今後の教育活動に参考になったといえる。本年度は研究全体会を開催して研究の総論を伝える場を設けた。

その上で否定的な回答について、各項目の数値を相対的にみると「理解度」と「活用度」が高い。この「活用度」について附属岡崎中学校では、本年度は昨年度の検討を受けて、岡崎市立竜海中学校の教員にも授業公開日程を伝え、時間のある希望者が参観できるような機会を設けた（1学期実践、2学期実践）。

2学期実践の参観者からは、「感じられたこと」をフォームにて入力して情報を収集することができた。「参考になった、今後活用できそうだと感じられたこと」の一部を紹介する。

- ・ 生徒から出た意見を次の本時の課題にするような流れができていて（生徒がつくる授業）、生徒が主体的に取り組む授業のイメージがとてもできた。＜保体＞
- ・ 男女共習が可能な教材を考えているので、ラウンドボールは安全面、種目の面白さともに授業に取り入れてみたいと感じさせられるものだった。＜家庭＞
- ・ リアルタイムログは、その場で気づいたことをすぐに記録として残せるので、プリントで振り返りを書くよりも、効率がいいなと思った。＜保体＞
- ・ 子どもの意見をじっくり聞く姿勢を、附属の先生方のように大切にしていきたいと思った。＜数学＞
- ・ 「話し方」について学ぶ切り口としての「ラジオ」という発想。映像や文章をそぎ落とした「ラジオ」なら、声色や話し方、「伝わる」表現について考えやすい。＜国語＞
- ・ 意見交流の隊形は、基本学級に向けて話ができる向きに自然になるので、活用していきたいと思った。また、今回の授業のシートでの意見交流について、私も、iPadを活用した考えの共有を授業で取り入れているが、個々の考えがないと難しいと感じていた。今回の授業で生徒が取り組んでいた「他者の考えを解決する方法」など、「自らの考えは出てこなかったが、人の考えはこう思う」という生徒にとって、問題解決へのきっかけにできる、とても参考になるシートだと感じた。他者の考えから自らの考えを深める、取り入れてよくしていく、こういった授業を私も展開していきたいと思った。＜数学＞
- ・ フレキシブルグルーピング。生徒たちが

ペアによって配置や作戦を変えるなど工夫
して良かった。〈保体〉

- ・ 高跳びのマットについて、1時間で7種
もできるということ、楽しさについて考
えるということは今までしたことがなく生涯
スポーツへという考え方〈保体〉

こうした附属岡崎中学校と岡崎市立竜海中
学校との交流は、互いの実態や状況を把握す
る貴重な機会となり、附属学校と公立学校と
の研究活動の往還するアイデアに結実してい
く取組として貴重である。ねらい・内容につ
いて分かりやすかったどうかの「理解度」や
研究活動に活用しやすいかどうかの「活用度」
を引き続き検討していきたい。

6 附属高等学校

表15は、附属高等学校の公開1・2及び分
科会におけるアンケート回答者数と教員経験
年数を整理したものである。回答者には「不
明」及び「無回答」が含まれていた。なお、
学生等を含めると99名の参加となった。

表15 参加者の教員経験年数

教員経験年数	人数
1～5年	11
6～10年	12
11～20年	26
21年以上	13
合計	62

表16・17は公開1・2の集計結果である。
また表18は分科会の集計結果である。

表16 公開1の集計結果 n=76

項目	とても思う	少し思う	あまり思わない	全く思わない
関心度	47	16	3	1
理解度	47	16	2	1
参考度	47	15	5	1
活用度	37	32	6	1

表17 公開2の集計結果 n=67

項目	とても思う	少し思う	あまり思わない	全く思わない
関心度	61	13	1	0
理解度	50	23	3	0
参考度	56	18	1	0
活用度	32	39	3	0

表18 分科会の集計結果 n=52

項目	とても思う	少し思う	あまり思わない	全く思わない
関心度	42	10	0	0
理解度	38	13	1	0
参考度	39	13	0	0
活用度	33	17	2	0

公開1と公開2は同日にされたものである。
参加者の教員経験年数は、昨年度は「6～10
年」が最多であったが、本年度は「11年～
20年」が最も多く、「21年以上」と合わせると
参加者全体の約62%となった。

各項目については昨年度と同様、肯定的な
回答が否定的を上回っており、特に「関心度」、
「理解度」及び「参考度」において、授業の
ねらい・内容への関心が高く、分かりやすい
取組であったと考える。

「活用度」については、他項目と比較すれ
ば否定的な回答がやや高いが、それでも肯定
的な回答は否定的な回答を上回っている。附
属高等学校では、シンポジウムの当該教科は
3年に1回のため、また、コロナ禍を挟んだ
ため、前回から時間的に空いてしまっている
ことに鑑み、本年度の「活用度」に関する取
組は、各教科による新科目への取組を持ち
帰ってもらうため、単元案と当該授業のワー
クシート等を多く配付した。今回配付したも
のをベースに授業を作り、次回でアンケート
に回答してもらうイメージで用意した。なお、
附属高等学校は教科研究会等での発表を通し
て、他校の教員とつながりがあるが、組織だ
った活用については今後の課題である。また、
多様な高等学校のニーズがある中で、どこに
焦点を置くのかなど、研究の設定も今後の課
題となる。

7 附属特別支援学校

表19は、附属特別支援学校の公開1と公開
2におけるアンケート回答者数と教員経験年
数を整理したものである。

表20・21は公開1・2のアンケートの集計
結果である。

表19 参加者の教員経験年数

教員経験年数	人数
1～5年	22
6～10年	18
11～20年	23
21年以上	18
合計	81

表20 公開1の集計結果 n=81

項目	とても思う	少し思う	あまり思わない	全く思わない
関心度	67	13	0	1
理解度	63	18	0	0
参考度	66	14	1	0
活用度	54	24	3	0

表21 公開2の集計結果 n=81

項目	とても思う	少し思う	あまり思わない	全く思わない
関心度	65	15	0	1
理解度	62	19	0	0
参考度	58	21	2	0
活用度	51	27	3	0

参加者の教員経験年数は、昨年度は「1～5年」及び「6～10年」が参加者全体の約60%を占めていたが、本年度は「11年～20年」が他の項目に比べて多く、各経験年数での偏りもなかった。

各項目については昨年同様、肯定的な回答が否定的な回答よりも大幅に上回り、特に「関心度」と「理解度」は高かったといえる。

「参考度」と「活用度」については、他の項目と比較すれば相対的に低い。それでも肯定的な回答が否定的な回答を上回っていることから、今後の教育活動に参考になったといえる。また、特別支援学校における「活用度」に関する取組としては、分科会終了後に自由参加の授業会場見学会を15分間設定し、授業者への質問及び意見交換を積極的に実施した。こうした取組は「活用度の向上」につながると考える。

Ⅲ 結論と今後の課題

以上、本稿では、2023年度の大学・附属学校園連携プロジェクト（戦略6）における附属学校園アンケートの結果から次年度への改

善策を検討した。

7 附属学校園の研究発表会は昨年度と同様に「関心度・理解度・参考度・活用度」の4項目すべてにおいて、肯定的な回答が否定的な回答を上回ることができた。この回答者の教員経験年数は、「1年～5年」「6～10年」「11～20年」「21年以上」の区分において、大きな偏りがなかった。そのため、どの教員経験年数にも対応する研究内容であったと考える。

また、昨年度の課題を受けて、2023年度は「活動度」に関わる取組を検討してきた。引き続き、7 附属学校園における「活用度」の取組については継続検討していきたい。具体的に参観者はどのような活用をしようとしているのか（したのか）等を把握することも今後の課題となる。さらに、活動に関するニーズと教員経験年数等による内容の差異等も含めて分析をしていきたい。

こうしたアンケート結果は2023年度の大学・附属学校園連携プロジェクト（戦略6）における検討対象に留まらず、大学と附属学校園が一体となる特色を生かした互いの実践理解を深める契機になっている。また、附属学校園と公立学校等との連携も視野に入れて、引き続き、「活用度」に着目して実証研究を検討していきたい。

なお、2023年度の大学・附属学校園連携プロジェクト（戦略6）のメンバーは、次の通りである。

- 杉浦慶一郎（連携・附属学校担当理事）
- 鈴木一成（保健体育講座）
- 真島聖子（社会科教育講座・学長補佐）
- 小塚良孝（外国語教育講座・副学長）
- 石川 恭（保健体育講座・附属学校部長）
- 加納誠司（生活科教育講座）
- 砂川誠司（国語教育講座）
- 西垣祥子（附属幼稚園・研究主任）
- 松尾裕太（附属名古屋小学校・研究主任）

木村英勝（附属岡崎小学校・研究主任）
柳田真弥（附属名古屋中学校・研究主任）
佐藤裕一（附属岡崎中学校・教務主任）
朝倉 大（附属特別支援学校・研究主任）
川瀬英幹（附属高等学校・研究主任）
佐藤重成（附属学校課課長）
鬼頭百合子（附属学校課副課長）